

21. 2週間以上高度の意識障害異常精神症状が持 続していた急性CO中毒に対する高圧酸素療法 の経験

太田 幸吉* 斎藤 春雄* 三枝 俊夫*
千見寺 勝* 樋口 道雄*² 野口 照義*³
吉岡 宏三*⁴

1973年7月から1978年6月までの5年間に当施設(斎藤労災病院)でOHP治療を施行したCO中毒症は僅かに20例に過ぎないが、都市ガスによるものが13例で65%を占め多く、20代の自殺が目立った。発見からOHP開始までの時間が16日以上症例が7例あり全症例の35%を占めていることは、早期OHP治療の重要性¹⁾が叫ばれて6,7年経過している現在、私共が反省しなければならない問題点の一つと考えている。遷延例には頻回のOHP治療が施行されているのも目につく。今回は長時間半昏睡状態が継続し予後が絶望的と思われた〔症例18〕と、意識レベルの改善は得られたが頑固な精神症状の固定化が心配された〔症例19〕の興味ある2症例を紹介する。

〔症例18〕T.O. 20才、男子、大学受験生、石油ストーブ使用のまま風邪気味で床につき、翌朝叔母の訪問により昏睡状態を発見され某病院に収容された。発見時ストーブはまだわずかに火がついて居り、現場の状況からストーブの不完全燃焼が原因と推定された。

気管切開によるO₂吸入、その他急性CO中毒としての一般的治療を15日間受けたが、呼吸は浅表で頻数、時に間代性の痙攣がみられ、発汗異常、四肢筋緊張、半昏睡状態がつづき、高度

の異常脳波が認められ、意識レベルの改善傾向が得られなかった。Back ground activitiesは2~3 cps 40~100 μ v 一部が4 cpsであった。16日目に当院へ転入院した。入院時も同様な状態で、直ちに2 ATA, 120分O₂吸入、1日1回の連日法を2週間行い、以後90分、週6回法を施行し、合計35回のOHP治療を受け入院38日間で退院した。入院中の経過は、入院後5日目には開瞼多く、眼球運動活発となり、9日目までは呼びかけに全く反応を示さなかったが、その後意識レベルの回復は極めて早く、12日目には“お早う”の呼びかけに対し笑い、行動で答える様になった。23日目には、文章を書き、会話も可能となった。退院時脳波では尚中等度の異常、CTスキャンでも中等度の脳室系の拡大を指摘された。両下肢に残る軽度の運動障害に対しリハビリテーションを受けるため他施設に転医し、そこで更に20回のOHP治療を受けたのち四肢の運動障害も軽快し帰郷、その後の精密検査で受験生活に支障なしと診断され元気に勉学にいそんでいる。書字も文章の内容も正常人と変わりなく、現在までのところ再発の徴候は全くみられていない。

〔症例19〕K.I. 19才、女性、レジスター係、車の排気ガス引き込みによる心中未遂。

発見時は昏睡状態、相手男性は既に死亡、某病院に救急入院、血圧下降、呼吸浅表、加療により5日目に簡単な問に応答が可能となり、その後意識レベルは次第に改善されたが、情緒不安、奇声をあげ興奮したりすることが多く精神症状が著明で改善の傾向がみられず症状の固定

* 福生会斎藤労災病院

*² 千葉大学第一外科

*³ 千葉大学中央手術部

*⁴ 千葉労災病院

化が心配され、某大学の精神科を経て22日目に当科へ転入院した。2 ATA 90分 O₂吸入、週6回法で70回のOHP治療を行った。入院中の経過は、入院4日目には早くも異常な興奮状態は少なくなり、情緒不安定で時に泣きだすことはあったが、概して多幸的となり、表情に微笑みがみられる様になった。見当識、記憶力、記銘力にはかなりの障害が残っていたが、その後の精神症状の改善は極めて急速で、19日目頃には殆んど症状は消失した。記憶、記銘の障害の改善は59日目頃までにはかなり軽快し97日目に退院した。軽度の知能低下、疲労感、手指の巧緻運動障害による書字困難を認めた。退院3ヵ月後の脳波、CTスキャンでは軽度の異常が尚残っていた。10ヵ月後の現在、行動が積極的となりレジスター係の仕事に復帰している。細かい文字を書くときの書字困難は尚残り、極めて軽度であるが知能低下も認められる。この症例も現在のところ再発の徴候はみられていない。

藤井ら²⁾は急性一酸化炭素中毒後の遷延例49症例の検討から、例外を除いて、中毒にひき続く意識障害の時間の長短は続発症の症状と予後に関係するとし、意識障害が1週間つづいたにも拘らずほぼ治癒した1症例を除けば、昏睡時間5日以上のある症例の予後が極めて悪いことを報告している。又昨年(1976)の第12回の学会においても岩谷ら³⁾は、CO中毒274例のOHP施行例について検討がなされ、3~4日を経過してなお周囲との意志の疎通を欠く場合には、それ以後に意識の改善を認めた症例はなかったと報告している。又、八木ら⁴⁾はOHP治療9日目に意識回

復を得られた1例を報告している。これらの報告例から考えると、〔症例18〕は、極めて稀な興味ある症例であり、発症後16日目に初めてOHP治療を開始し、根気よく繰返し治療を行うことにより、24日間にわたる意識障害の継続にも拘らず、ほぼ全治し得たことは誠に幸運であった。〔症例19〕はSibeliussの分類に従えば、非間歇型に属する症例であるが、発症後22日目にOHP治療が開始されたにも拘らず、固定化が心配された精神症状は比較的短期間に改善した。このことから、もし早期OHP治療が行われていたなら予後も良好で、治療期間も短縮されたのではないと思われる症例であった。これらの症例を通じOHPの効果はいうまでもないことであるがOHP治療の早期開始の重要性を今更ながら痛感すると同時に、私共の地域で早期治療が遅れた症例が多かったことはOHP治療の啓蒙の日頃の努力がまだまだ足りないことを示す事実として反省している。改善の見込の少ない予後不良を予想される意識障害時間の長い症例に対しても積極的にOHP治療を比較的長時間を覚悟して繰返し施行することの必要性を教えられた。

文 献

- 1) 小川道雄：第7回日本高気圧環境医学会総会特別講演。大阪，1972。
- 2) 藤井 稔ほか：一酸化炭素中毒，主に急性中毒後の遷延例について。神経進歩，4：67~82，1959。
- 3) 岩谷昭美他：当科におけるOHP施行例について。第12回日本高気圧環境医学会総会。名古屋，1977。
- 4) 八木 博他：最近経験した高圧酸素療法2,3の症例。日本高気圧環境医学会雑誌，11：89，1976。

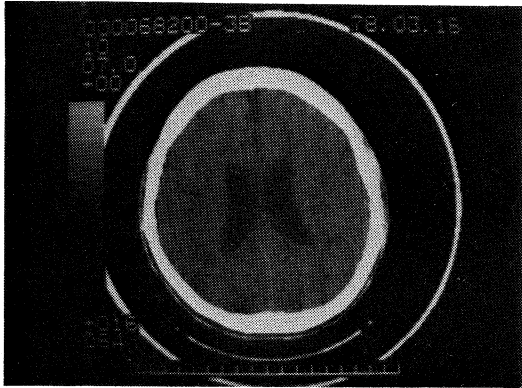
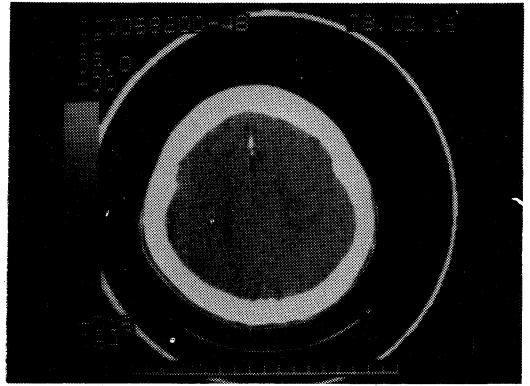
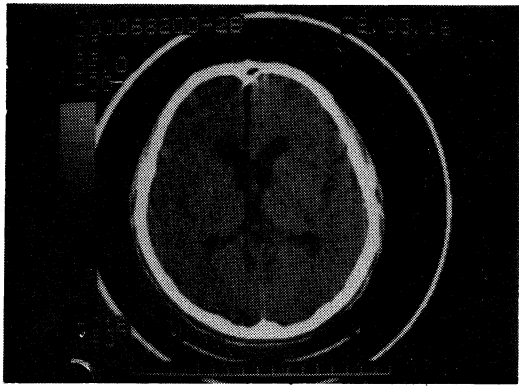


Fig.1

発病後 1ヵ月21日目

OHP 32回目

CT所見

3rd & lateral ventricular dilatation with some ballooning. Sylvian fissure enlarged.

脳実質: sulcal dilatation (2B-4B)

臨床との関連

cerebral atrophy (moderately)

53.3.6
 53.3.6
 この人は、
 年増 日本人
 美人 女性
 この人 健康か?
 この人、三下まで 通い、帰りますか?
 45市 中野区

発病後 1ヵ月11日

ア月の中は殆んど神戸中央市民病院で
 療養ばかりが続きました
 結果は、この方の日常生活、特に勉強の方には
 何れも影響がないとのこと
 僕自身としましては、今年中静養するつもりです。
 勉強の方は身体も鍛えようかと
 思っています。後、症状のいいものも殆んどなく
 元気に図書館へ通っています。
 今2回は体調も回復した時にせいで
 少しずつ食うようになりました。
 入院当時は1313とお世帯になり
 本当にありがとうございました。
 また東京へ行った時にはぜひ遊びたいと
 思っています。

敬具

奇蹟労務病院 太田先生へ

53.9.21

大野哲史

発病後 8ヵ月26日

Fig.3 [症例 18] 書字

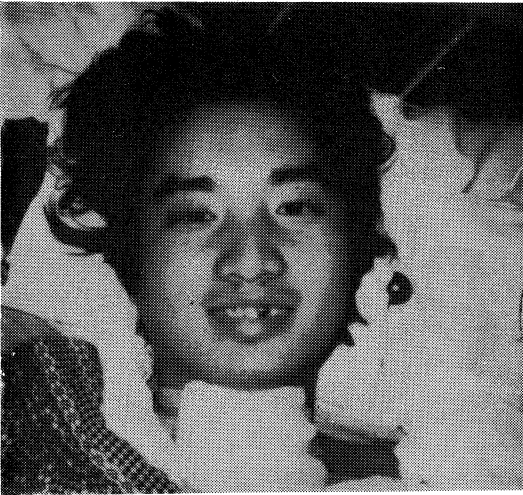
①



②



③



④



Fig.2 症例18の顔貌の変化